

# 進学希望者が多い普通科高等学校のキャリア発達支援 ー進路実現を目指したキャリアノートー

教職開発実践専攻（学校改善コース） 高橋 清 仁

## I . 本研究の目的

平成11年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」でキャリア教育の必要性が初めて提唱された。それから十数年が経った。しかし、高等学校（以降「高校」という。）では、専門高校を中心に「既にやっている」、普通科高校を中心に「キャリア教育＝職業教育」と誤解していたり、進学希望者が多い普通科高校（以後「進学校」という。）の教員の中には「進学校にキャリア教育は必要ない」とキャリア教育の本質を認識できていない教員が少なからずいる。

では、普通科高校でキャリア教育は行われていないのかということそうではない。ほとんどの学校で特別活動や総合的な学習の時間（以後「総合学習」という。）を利用して、キャリア発達を促す活動や、将来を考えさせるための進路行事、自己を見つめ直すホームルーム活動等が行われている。様々な教育活動を通して、キャリア教育で育成すべき能力である基礎的・汎用的能力は育まれている。しかし、多くの普通科高校においてこれらの活動は、意図的、系統的、計画的に進められることが少ないことから、効果が十分上がっていないことが課題である。

平成26年に岐阜県教育委員会は、各学校に「キャリア教育の全体計画」と学年毎の「キャリア教育の年間指導計画」を作成・提出させ、キャリア教育を体系的に推進することを求めるなど、キャリア教育推進を図っている。本研究では進学校におけるキャリア教育の推進のため2つの視点から考えた。1つ目は、断片的に行われている様々な学習経験や教育活動を意図的、系統的に進めていけるような教材の開発と、その計画的な運用・実践を行う。2つ目は、生徒のキャリア発達を促す指導の中心となるHR担任に対して、開発した教材の活用の仕方などを支援するシステムを構築することにより、教員のキャリア教育に対する意識向上と負担軽減を目指し、指導の一元化を進める。

進学校では、大学入試を決して避けて通ることはできない。生徒の進路や生き方を扱う教育活動を新たに増やすことは難しい状況である。このことから現在行われている様々な教育活動を通して、生徒の基礎的・汎用的能力を育むことに注目することにより、論理的思考力・創造力や意欲・態度を身に付けながら大学入試を経て、社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行を教師が支援する。この基礎的・汎用的能力に注目した取組を通して、進学校におけるキャリア教育をより充実させることを目的とし、研究を進める。

## II . 進学校が目指すキャリア教育

### 1. 大学選択のキャリア教育的意味

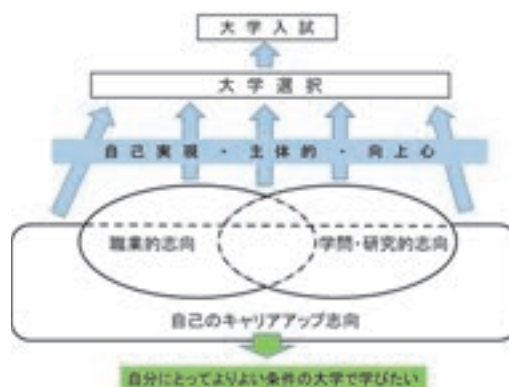
進学校では大学入試が中心であるから、キャリア教育はできていないと言われている。そこで進学校では、大学選択への志向を高めることに注目したいと考えた。

大学を選択する際、将来就きたい職業が明確で大学を選択する職業的志向の生徒（職業選択型）や、学びたい学問が明確で大学を選択する学問・研究的志向の生徒（研究選択型）ばかりではなく、自らの将来像を明確に描けていない生徒もいる（図1）。将来の目指す分野を明確にしているわけではないが、自己の将来の選択肢が増える可能性が高い、自分にとってよりよい条件の大学を選ぼうとするキャリアアップ志向（キャリアアップ型）は、自己の生き方について主体的、自立的に考え、行動できる生徒を育むことから、キャリア

ア教育的には意義深いものである。

センター試験で思うような成績を修めることができず、第一志望大学への合格の可能性が低くなった場合でも、諦めることなく自分の能力を向上できる他大学を主体的に探し大学入試へ立ち向かっていく態度や、第一志望の大学でなくても入学した大学で、なりたい自分に向けて意欲的に取り組むことができる態度を、自己のキャリアアップ志向を育成することにより可能とすることができる。

進学校では、生徒の志向を高める・育むことを意識したいと考えた。



大学選択の類型	解説	例
職業選択型	将来就きたい職業に就くために大学を選ぶ	医者になりたいから医学部を選択 弁護士になるために法学部を志望
研究選択型	興味・関心のある学問や研究を学ぶために大学を選ぶ	牧草子や徒然草を深く学びたいから文学部を選択 飛行機がなぜ飛ぶのかを研究するために工学部を選択
キャリアアップ型	自己の能力を更に伸長するために大学を選ぶ	地元で有名な研究レベルの高い名古屋大学を選択 遠方でもいいので有名な国立大学を志望 資格合格率の高い大学を志望

図1 「大学選択」 筆者作成

## 2. 基礎的・汎用的能力の重要性

平成23年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」で、「社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力に含まれる要素」として、「基礎的・基本的な知識・技能」「基礎的・汎用的能力」「論理的思考力、創造力」「意欲・態度及び勤労観・職業観等の価値観」等で構成されると指摘している。

ほとんどの学校で、授業や総合学習などの学習活動やボランティア活動、家庭学習などの個人の活動、文化祭や体育祭、部活動などの特別活動等を通して、生徒が「基礎的・基本的な知識・技能」「論理的思考力、創造力」「意欲・態度」「勤労観・職業観」を育むことを実践している。

進学校におけるキャリア教育を充実させるためには、現状よりも「基礎的・基本的な知識・技能」を培うことによって、さらに高い力である「論理的思考力や創造力」を育み、高めることが必要である。生徒一人ひとりが自分なりの「勤労観・職業観」を確立することにより、自分の夢や生き方を考察し、実現しようとする「意欲や態度」を高めることが必要である。それらを通して主体的に向上心をもって自己実現を目指し、「大学入試等」を経て「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行」ができる。

様々な課題を発見・分析・解決したり、従来の考え方や方法にとらわれずに物事を前に進めていこうとする「課題対応能力」を培うことにより、基礎的・基本的な知識・技能、論理的思考力、創造力を促進することができる。学ぶ意義や働く意義を理解したり、将来を考察し、実現のために行動する能力「キャリアプランニング能力」の育成により、意欲・態度及び勤労観・職業観を促進できる。また、「人間関係や社会形成」を通して、「自己の能力や適性、役割を理解」しながら、勤労観・職業観が形成される。このように「基礎的・汎用的能力」を育むことにより、基礎的・基本的な知識・技能、論理的思考力、創造力、意欲・態度、勤労観・職業観を助長することができる。

このことから、キャリア教育が育む「基礎的・汎用的能力」に注目して、基礎的・汎用的能力を直接的・意識的に育むことにより生徒のキャリア発達を促すことができ、社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行を支援できることから、進学校におけるキャリア教育をより充実することができると考えた(図2)。

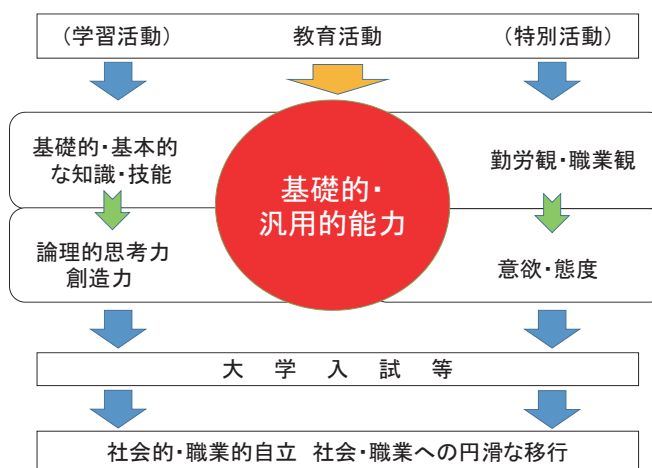


図2 「平成23年中央教育審議会答申からみた基礎的・汎用的能力の重要性」 筆者作成

進学校では、中学校までに身に付けてきた基礎的・基本的な知識・技能をもとに、授業等を通して、思考力・判断力・表現力等を育む。「他者と関わりながら社会に参画し、適応する能力（人間関係形成・社会形成能力）」「自己の能力や適性を理解する能力（自己理解・自己管理能力）」「なりたい自分を実現するために必要な情報を理解したり、課題を発見したりする能力（課題対応能力）」「将来を見据えた計画を立案することができる能力（キャリアプランニング能力）」等を身に付けることにより、意欲や態度を高めることができる。つまり「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力・創造力」を将来の自らの積極的な生き方への「意欲・態度」へと橋渡しをし、結び付けるものが「基礎的・汎用的能力」である。進学校の生徒にとっての大学選択の「志向」である「職業的志向」「学問・研究的志向」「自己のキャリアアップ志向」を育み、生徒自らが主体的に将来を見据え、高い目標を持ち、自己実現を目指すために選択した大学への入試合格を勝ち取る支援をすることが、進学校でのキャリア教育で必要なことである。

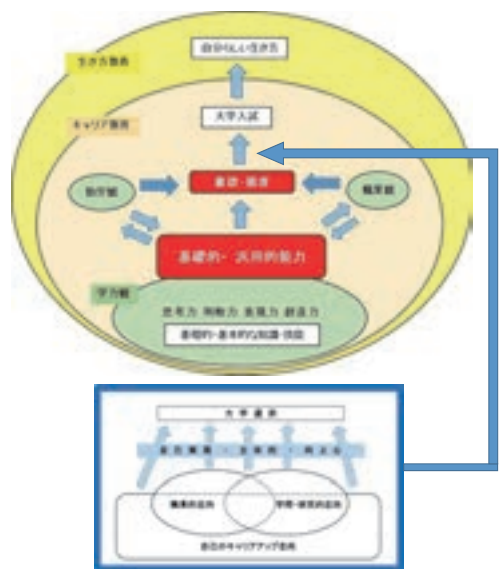


図3 「進学校における基礎的・汎用的能力の重要性」 筆者作成

このことは生徒個々の将来の夢やそれを実現する力を育み、自分らしい生き方に近づくことができ、社会・職業へ円滑に移行することができることである。進学校の教員が、教育活動を通して生徒に「基礎的・汎用的能力」を身に付けさせることを意識することは、進学校におけるキャリア教育を推進することにも繋がる(図3)。

### 3. 進学校におけるキャリア教育の転換

進学校におけるキャリア教育は主に、大学入試に必要な学力を身に付けることと、勤労観・職業観を育む各種行事を実施することにより、生徒自らが「基礎的・汎用的能力」を身に付け、両者を結び付けてきた。つまり高校、特に進学校におけるキャリア教育は大学入試への対応と、直接勤労観・職業観を育むことに重きを置き、これの基盤となる能力である「基礎的・汎用的能力」をあまり意識して教育活動を行うことはなかった。また、直接生徒の進路や生き方を扱う教育活動が限られ、直接勤労観・職業観を育む活動も少ないことから、進学校のキャリア教育はあまり実施されていないと捉えられてきた。この開発実践において「基礎的・汎用的能力」に注目する理由は、この能力が学ぼうとする意欲を高めたり、自分にふさわしい勤労観・職業観を形成する基盤となると考えるからである。さらに「基礎的・汎用的能力」が、直接進路に関わる教

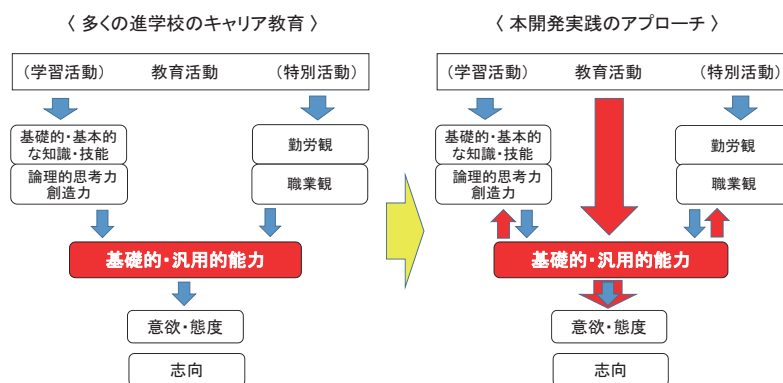


図4 「進学校におけるキャリア教育の転換」 筆者作成

育的アプローチによってのみ身に付くものではなく、すべての教育活動によって育むことができるものであると考えるからだ。

このことから本開発実践は、両者を意識的に融合させるために「基礎的・汎用的能力」を幅広いアプローチで体系的に育成することを中心におくことにより、キャリア教育が育む力に注目して進学校におけるキャリア教育をより充実させることとした（図4）。

#### 4. 全体構造

恵那高校の総合学習は、1年生では学習指導要領改訂の基本的な考え方のひとつである論理的な思考力や表現力の育成を目指した「小論文指導」を行っている。1年生後半からは、2年生の6月に実施される沖縄への修学旅行2日目の「班別研修」の計画・実践・成果報告指導を行っている。沖縄に関係する研究テーマを設定し、課題を追究、検証するために情報を収集・分析し、現地で検証・調査するための計画を立案するなどの課題対応能力や、実際現地で検証するために現地施設とのアポイントメント取り等、人間関係形成の育成を目指している。2年生後半から3年生にかけ、生徒の将来学びたい学問や進みたい分野について、各自テーマを設定し、仮説・検証しながら追究・探究し、その成果をゼミ内や校内で発表・評価する「生き方我が道」指導を行っている。この「生き方我が道」は、正しく大学選択を含めたキャリア教育そのものの取組であることから「中核」となる。

平成21年3月に改訂された高等学校学習指導要領では、「生きる力」を育むという理念のもと、基礎的な知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を目指している。このことから確かな学力を習得するための学習活動を実施する場である授業も重要なウエイトを占めている。さらに、確かな学力の延長上にある大学入試を含め、進路実現を達成するための学力を育成することも、進学校では避けることができないことである。このことから恵那高校では、大学入試によって推し量られる基礎・基本的な内容を確実に習得させるためや、大学の講義に対応できる思考力・判断力・表現力の育成のため、課題に対して諦めず、ねばり強く探究・追究できる力を育むために授業を「中核」に位置付けることが必要である。

高等学校学習指導要領でホームルーム活動の目標が、「ホームルーム活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてホームルームや学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。」と示されている。これは、人間関係形成・社会形成能力やキャリアプランニング能力などの基礎的・汎用的能力を育成するための内容と一致している。さらに恵那高校では大学進学に関する進路講話や進路適性検査、職業講話、大学の模擬授業を含む学部学科説明会等、多様なキャリアガイダンスを実施しているのがホームルームの時間であることから、ホームルームの時間をキャリア教育の「中核」にする。

以上から、恵那高校では3つをメインとしてキャリア教育を実施していく。

中核の柱の他に、高い目標を持って主体的、意欲的に取り組み、自己をキャリアアップしていこうという意識を育成することができる文化祭・体育祭や部活動、進路行事等の「集団の活動」も、キャリア教育を推進するためには必要である。また、集団の活動を実施した後に、生徒個々の心の中に感じたことや考えたことを丁寧に確認させる機会を持たせ、次のステップに進むためのサポートをするキャリアカウンセリングの場となる個人面談やボランティア活動、家庭学習等の「個人の活動」によって、「学力」や「基礎的・汎用的能力」、「個性」等を育成し、大学入試を経て、生徒個々の「将来を見据え

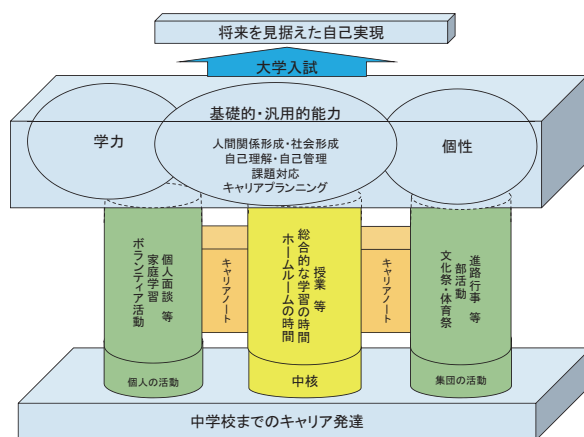


図5 「恵那高校のキャリア教育の全体像」 筆者作成

た自己実現」を目指す。

中核と個人の活動、集団の活動の3つの柱でキャリア教育を進め、3つの柱の橋渡しとなるもののひとつとしてキャリアノートを作成し、活用していく(図5)。

### Ⅲ. キャリアノートの開発

#### 1. 生徒用キャリアノート

恵那高校でも今までに、様々な教育活動や学校行事を通してキャリア発達を促すために、考察したり振り返ったりするための用紙を、それぞれの分掌や係で作成し、実施してきた。例えば、進路指導部で大学調べや学部学科調べについて記入する用紙、学年でオープンキャンパスへの参加を指示し記入する用紙、企画部で修学旅行の班別研修について記入する用紙、教育相談係で個別懇談に利用するための資料等を各々作成している。しかし、他の分掌や係との関連を意識することはなく、分散的で断片的に行われているため、キャリア教育を系統的、計画的に実施しているとは言いがたい。また、生徒に記入させた用紙はまとめてファイリングすることもないため、教師も生徒も振り返ることができず、継続的な支援や評価には活用できていない。

以上の課題と、キャリア教育は様々な学校教育全体の活動を通じて体系的に行われるものという観点から、授業や家庭学習、文化祭、修学旅行、個別懇談など様々な項目・内容を包括し、さらに基礎的・汎用的能力を高めるという視点も意識した「キャリアノート」を開発する。ノートという冊子により、生徒は学習活動の過程や成果を振り返ることができ、教師も成長や変化を把握し、評価できると考えた。

#### 2. 教師用手引書

キャリアノートを利用して生徒に指導する際、「指導上の留意点・評価」等を記入した「教師用手引書」も作成した。指導上の留意点には、主に3つ記載している(図6)。

一つ目は、生徒に記入させる内容やいつ頃利用・記入させるのが適当なのか等、ノートを利用して指導する際の教員に対する補足・支援する内容を記載している。二つ目は、今までは評価に関しては担任まかせになっていた部分がある。そのため共通の観点で評価をするため、生徒が記入したノートの内容に対して、どのような観点で評価するのかを記載している。三つ目は、基礎的・汎用的能力を意識して育むということから、このノートや活動を通して身に付けたい基礎的・汎用的能力を記載している。最後に「朱書きをお願いします」と「ファイルに綴じて保存させる」と記載した。個々の生徒が記入したことに対して、教師が朱書きをすることにより、さらに生徒個々のキャリア発達の段階に応じた支援を行うことができる。また、ファイルに綴じ込むことにより、生徒が振り返りに確認できたり、教師が生徒のキャリア発達を理解することができ、評価するために利用しやすいという利点がある。



図6 「教師用手引書」 筆者作成 筆者作成

「教師用手引書」を利用することにより教員の意識向上を図ることができる。基礎的・汎用的能力を育成するという観点で「教師用手引書」は意図的、系統的に作成されていることから、「教師用手引書」を利用して「キャリアノート」で指導することにより、キャリア教育を体系化することができ、指導を一元化することが可能である。現在、教員の多忙化が叫ばれているが、この手引書を利用することにより、体系化して指導することができることから、忙しい教師の負担軽減にも寄与できると考える。

### 3. 運用システムの構築

平成26年度、恵那高校ではキャリア教育を推進するために、キャリア教育主任（筆者）と各学年会所属のコーディネーターとによって構成された「キャリア教育係」という新しい担当を進路指導部内に設置した。キャリア教育全体計画や年間指導計画表のもと、キャリア教育主任が「月別構造図」（図7）を作成し、月別構造図に沿ったキャリアノートや教師用手引書を開発した。キャリア教育係では、キャリアノートや教師用手引書の検討や使用するにあたっての留意点の確認、利用後の意見交換、キャリア教育に関する計画の立案や行事の運営等を実施した。また、例えば10月から11月にかけて「外部講師による講話」や大学の先生方を招いての「学部学科説明会」、その後「大学調べ」、「受験科目調べ」と進路選択に関する進路行事が行われる。キャリア教育主任は、月別構造図を用いて、コーディネーターに対してそれぞれの行事が次のどの行事にどのように反映させるかを解説する。

そしてコーディネーターには、キャリア教育係と各学年会との橋渡しという役割を果たしてもらうため、コーディネーターと各学年のHR担任からなるキャリア教育推進委員会を設置した。委員会では、コーディネーターが学年団の教員に対して、月別構造図を前月の月末に解説し、一ヶ月間のキャリア教育活動の流れを学年団に周知徹底した。また、キャリアノートや教師用手引書の利用方法や評価の観点等、使用するにあたっての留意点等を説明したり、HR担任からキャリアノートや教師用手引書に対する意見を聞き、評価・改善に生かした（図8）。

コーディネーターやHR担任からは、次回にどのような行事があるのかを把握することができ、さらに各行事を関連付けることを意識して実施することができたという意見をもらった。

篠原（2012）は、「教職員集団が主体的・自律的に教育目標・経営目標を定め、その目標を共有化し、協働的に働けば学校は改善できる。」という内発的学校改善による学校改善の推進を指摘している。さらに佐古（2012）は、「教師同士の相互作用を活性化させ、学校の実況や課題の共有化を図る内発的学校改善のほうが学校改善に対して有効に機能する。」と述べている。キャリア教育の目標を定め、キャリア教育を推進するシステムの構築により、学年全体の指導の統一性やHR担任の系統的な指導の支援を行ったり、キャリアノートや教師用手引書の改良、さらには校内のキャリア教育推進、教員のキャリア教育に対する意識の向上を図ることができる。また、教師用手引書を利用し、意見交流をすることにより教員の資質を高めていく。そして個業的な教育活動から同僚的教育活動へと構造改革も推し進めることができる。

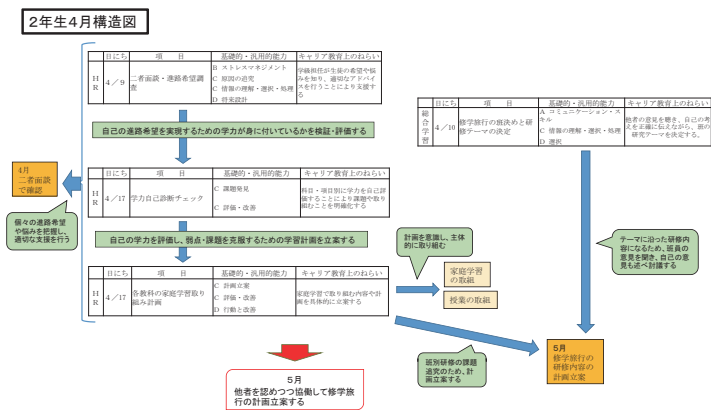


図7 「月別構造図」 筆者作成

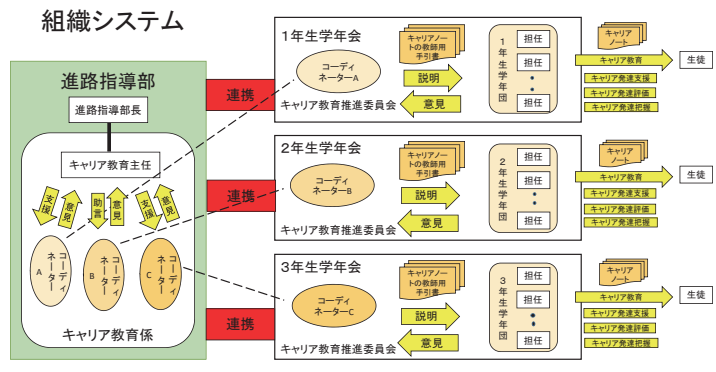


図8 「キャリア教育推進システム」 筆者作成

## Ⅳ．開発実践の実践状況と考察

### 1. キャリアノートの開発実践例

#### (1) 学年集会「将来・進路を考える」

平成23年の中央教育審議会答申では、「普通科の生徒に多い進学希望者の中には、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することを先送りにする傾向が高い。」と指摘している。また、現在恵那高校2年生である生徒が、1年生であった平成26年2月に、「将来の進路は決定していますか。」というアンケートを行ったところ、「決定していない」と回答した生徒は113名中69名（61.1%）であった。文理選択が終わった時期にも関わらず、6割以上の生徒が大学や学部、学科、職業のどれも決まっていないという状態であった。



そこで5月1日に恵那高校2年生を対象に、筆者が「将来・進路を考える」という題目で、学年集会を実施した。その中で、「大学生の現在の大学・学部に入学した時の満足度」や「他の大学に入り直したいと思うことがあるか」等の大学生の状況や、「卒業3年以内の離職率」や「離職理由」などの社会や就職の現状のデータを示し、話をした。さらに、恵那高校の「卒業生の進路状況」や「2年生の進路や就職の希望状況」のデータを示しながら、「自分らしい生き方を実現するための力や態度を身に付けながら、自分の将来の選択肢や可能性を広げ『なりたい自分』へ一歩ずつ近づいていくこと」、「自己実現するために超えるべき関門のひとつが大学入試であるが、大学等に入ることはゴールではなく通過点であり、学び続ける力・態度や働き続ける力・態度を身に付けていくこと」の大切さ、そのために「現在すべきことは何か」等を語った。将来を見据えながら自分にとってよりよい条件の大学を選択しようとする志を高めたり、自己実現のためにすべきことや必要な能力や態度を身に付けようとする意識を育むこと等、キャリア教育の視点にたった講話を実施した。

学年集会終了後、全生徒222名に対してアンケートを実施した。図9はその集計結果である。「(イ) なりたい自分や将来の夢を持って、今後生活していこうと思いましたが。」などの質問に対しては、「思った」「少しは思った」と回答した生徒の割合が高い結果を得ることができた。将来へ夢を持つことの大切さや、前向きに生活していこうと改めて認識した生徒が多かったと考えられる。「(ウ) いろいろな能力や力・態度を身につけることは大切だと思いましたが。」の調査に対しても、高い調査結果が得られた。このことから、キャリア教育が目指すものを生徒にも認識させるという目的は達成できたと考えられる。

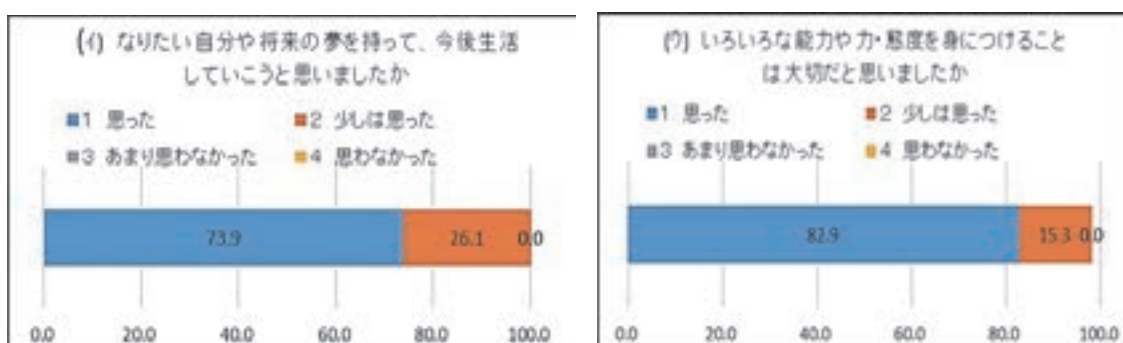


図9 学年集会後のアンケート集計結果

次は自由記述で書かれた感想の一部である。

- ・大学へ入学することだけでなく、社会人になってから必要となるスキルを身に付けることなども視野に入れて、将来を考え進路を決めることが大切だと思った。(女子)
- ・今回の集会で、改めて夢をもって生活することが必要だと思いました。私はまだ何となくしかなりたい職業が決まっていないので、これからの生活の中ではっきりとした夢や学部、大学を決めていきたいと感じました。少しでもレベルの高い大学に行けるように、授業はもちろん家庭学習も、充実したものにしたいです。(女子)
- ・ただ夢を持ち、理想の自分を描くだけでなく、それを実現するための力を身につけていくことがどれだけ大切かが改めて分かりました。(男子)
- ・部活動や学校行事で、仲間との時間を大切にし、人間的に成長していけるよう、今までよりいろいろなことにチャレンジしていきたいと思った。自分の可能性を探り、誰にも負けないと自信を持っていえる何かを身に付けようと思った。(男子)
- ・大学を決めるだけでなく、自分は将来何をやりたくて、そのためにはどこの大学、学部がよくて、そのために必要なことは何かなどを調べて、計画的にやっていけるようにしたいです。(男子)

学年集会を実施して、大学進学や大学選択に対して具体的なイメージができたり、大学進学や大学選択するために今何をすべきか、希望する大学に合格するために学習を前向きに取り組みたい等、主体的に行動していこうという意識を持つことができたと考える。生徒は目の前の大学に合格することや、合格するために必要な学力を付けることだけに関心を持ちがちである。しかし、大学入試が目的ではなく、社会へ出たときのことまで視野に入れて、将来就きたい職業に就くために必要な能力や態度を身に付けようと考えたり、自分を成長させるために具体的な場面をイメージして必要な能力や態度を身に付けていこうと感じた生徒が多くいたことは評価できる。

## (2) LHR 「発見を新たな力に」

基礎的・汎用的能力の基となった能力論のなかに、平成18年に、経済産業省が「組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」として提唱した「社会人基礎力」がある。社会人基礎力の3つの能力・12の能力要素のうち、生徒自身どの能力が身に付いているのか、どの能力が不足しているのかを自己理解することは、成長していくためには必要である。自己が備わっていると思っている社会人基礎力以外に、級友から備わっていると指摘された社会人基礎力を認識し、今後生活するうえで自信、強みとさせるきっかけとして、「発見を新たな力に」というテーマのLHRを実施した。生徒が仕事をする上で必要な能力を認識し、自己に備わっている能力を自己肯定感として高めたいと考える。また、級友に対してその生徒が備わっていると思っている能力について、具体的な事例を挙げながら思っていることを伝える機会を設けることにより、コミュニケーション能力の育成も目指す。

次はその際の教師の感想である。

- ・今回、席の近い者どうして3～4人のグループを作り、話し合いは4分間ずつで実施しましたが、「あまり話したことの無い人が自分の良いことをあげてくれた。」「新しい自分を知ることができた。」など、肯定的な感想ばかりでした。〇〇組については、自己肯定感が弱い生徒も多く、今回のことでクラスの中での自分に少し自信が持てたのではないかと思います。進路選択への影響は今後の進路アンケートなどを見ながらみていきたいと思います。(20代男性)
- ・今回のLHRを終え、自分に備わっていると思う力と、他人からの評価が異なっていることに驚きや、喜びを感じた生徒が多くいた。その反面、自己評価と他者評価が異なることに「理解されていない」と感じた生徒が数人いたことも興味深かった。(20代女性)

今回のLHRを実施し、自己分析・他者分析しながら自己考察した結果、自己肯定感を高めることができた生徒が多くいた。学習だけでなく様々な教育活動に対する意欲・態度が向上し、社会的自立へ向け必要な



基盤となる能力・態度の育成に繋げることができた。今後の進路選択との関連を意識する感想が教員から出たことは、キャリア教育に対する意識の向上が見られていると考えられ、一定の成果が示された。



### (3) LHR「各教科の授業の取り組み計画（前期）、部活動の取り組み計画」

恵那高校をはじめ進学校の部活動参加率は90%を超える学校が多い。つまり、進学校の生徒は文武両道を実践している。部活動は大会等でよい成績を残すために、自己やチームの課題を分析し、その課題を克服するために練習計画を立てる。その取組の成果を試合によって評価する。一年間に大会は何度かあることから、このPDCAサイクルを繰り返しながら、生徒はキャリア発達していく。これは、学習でも同じことが言える。授業や家庭学習でPDCAサイクルを繰り返しながら、学力を付けることにより大学入試に合格することが可能となる。そして生徒は、なりたい自分や自己実現に一步近づくことができる。様々な授業を通して、生徒は熟慮することや、物事を広く、多角的に見ることができるようになる。その力を身に付けることにより、部活動での課題や練習方法等を生徒自身で考察することができ、自己肯定感をさらに持つことができるようになる可能性がある。このように、部活動と授業は相乗効果があることから、このLHRは実施する意義があると考えられる。

次はその際の教師の感想である。

- ・部活動をしている生徒にとっては、このLHRで得た情報が部活動と勉強を両立していくことへの活力となったようです。生徒の意見の中に「部活動も勉強も限られた時間の中で、目標を定めて取り組んでいくことが大切」というものもあり、そのような建設的な意見を全体に伝えるよい機会となりました。  
(20代男性)
- ・自分の学校生活の足跡を残すのはよい試みです。前期が終わったときの生徒の反応が重要だと考えます。  
(40代女性)

今回のLHRによって、生徒にとっては部活動と大学入試は一見関係のない活動・取組であるように思われるが、実は関係していることを認識した生徒がいた。大学入試と授業を関連させ、部活動と授業を取り組むことにより自己実現や自己をキャリアアップしていこうと感じ取った生徒もいたことから、断片的な活動を意図的に関連付けようとした筆者のねらいは概ね達成できた。基礎的・汎用的能力を意識した活動の結果、学習への意欲・態度が向上し、自らの進路志向に繋げることができた。

## 2. キャリアノートの開発実践の考察

キャリアノートを「自分らしい生き方やなりたい自分を見つけるための手助けとなり、社会的・職業的自立に向け必要となる能力や態度を身に付け、成長を促進するための手助けとなるもの」、「いろいろな学習活動を通して学んだことや気づき、成長を書き留めたり、課題を克服するための行動や改善策を記入することにより、自己の将来を熟考し、自己実現をかなえるために役立つもの」という意図で作成した。

様々な取組を通して将来を考察させ、そこで学んだことや夢を実現するための自分の課題、どのような力・態度を身に付ける必要があるのか、今回の取組を今後の生活にどのように生かすのか等を記入させる。ノートをファイリングしておくことにより、以前の自分を振り返り、自己の成長を評価し、新たな自分を発見していく補助となるものとした。

毎年10月に実施している「進路希望調査」では、2年生の生徒で「未定（大学か就職だけでなく、進学希望だが、四年制大学・短期大学、専修学校等が未定も含める）」と回答した生徒は、平成25年度は240名中19名（7.9%）であった。今年度の生徒は、230名中4名（1.7%）であった。このことからキャリアノー

トを利用し、自己考察させ、HR 担任等が支援・指導を行った成果のひとつと考えられる。

大学も高校も生徒にとっては社会へ出るための通過点である。そこで出会った大人＝教師は、生徒が長い人生の大半を過ごす社会で、社会的・職業的に自立できるように必要となる能力や態度を育むことを意識することが重要である。本開発実践を実施した2年生の教員の意見や感想の中に、大学入試に合格させ進学先を決定すれば教師の役割は終わりであると考えていた教師が、生徒が社会へ出たときに適応できるような能力を身に付けさせる支援・指導をすることが大切であると認識できたことは、ひとつの成果であると考えられる。11月に本実践の感想や意見を聞いたところ、生徒は目標を達成する意志を改めて強く持てるようになったり、実現するために何をどのように取り組んでいけばよいのかを考察する等、自己実現に向け主体的に取り組もうと意識できたという感想があった。これは、基礎的・汎用的能力を高めたことによる成果であると考えられる。

今回実践した取組は、学年集会「将来・進路を考える」やLHR「発見を新たな力に」のような新たに取り入れたものもあるが、今まで高校で行われていたものをキャリア教育という視点で再考した取組も多い。今まで行われてきた取組は、行われるだけの意義や価値があるはずである。しかし、長年指導していると昨年度もやったから今年度も行うというように、取組が形式的になりがちである。様々な取組の意義や価値を教師が再認識できたという教師の感想もあったように、様々な教育活動の意図性を認識して指導することができたことから、教員の意識は上がったと考えられる。

今までのLHRなどの取組は、学年やHR担任に委ねられていた。例年この時期にこの内容でLHRを行うというノウハウは、ある程度学校で持ち合わせているが、どのような意図があるのかという説明もなく行われたりする場合がある。時には、深く検討もせずその場しのぎ的に行われる場合もある。月末のキャリア教育推進委員会で、「月別構造図」をもとに、月間計画を示し、各項目のねらいや次にどの項目に関連するのかを、各HR担任に解説した。そのことによりHR担任は、年間を通してこの時期にどのような活動・指導が必要なかが理解できた。また、今回の活動は何ヶ月後の何という活動に反映されるから、今回の活動で生徒にこのことを考えさせようと、教師が先の活動との関連を意識することにより、先を見通して計画的に指導できると感じたHR担任もいた。また、今まで行われてきた様々な活動をキャリア教育という視点で関連付けて教師側が意識でき、指導を受けている生徒も一層将来と関連付けて考察ができたのではないかと感じている教師もいたことから、キャリア教育を体系的に進めることができたと考えられる。さらに、HR担任の力量・指導力の差によって、生徒への支援・意識付けの差が大きく生じるが、学年統一の項目・題材を扱うことにより学年で足並みをそろえて実施できたことに、特に若い教員は安心感を抱いたようだ。

今回は開発と教育活動を平行して行ったため、ノートを冊子にすることはできなかった。一枚一枚のプリントでは無くす生徒もいるし、本来は実践した順番にファイリングするべきものであるがバラバラに綴じている生徒もいる。HR担任が配布・回収したり、保管する場合にも冊子の方が都合がよい。何よりも、生徒自身やHR担任が一年間、三年間の成長を評価するためには、冊子になっていた方がよいと考える。

本年度は筆者が所属している2年生を中心に開発実践し、キャリアノートを作成した。キャリア教育は、就学前段階から初等中等教育・高等教育を貫いて行われるものであるが、生徒が高校に在籍する3年間は少なくとも高校の教員がキャリア教育を実践する義務がある。1,3年生用のキャリアノートや教師用手引書、月別構造図を作成し、進学校のキャリア教育を体系化することにより、生徒の自己実現へ向け、キャリア発達を促す支援をしていきたい。

## 【参考文献】

- ・佐古秀一「学校組織開発」篠原清昭編著「学校改善マネジメント」ミネルヴァ書房、2012年、p10-12
- ・篠原清昭編著「学校改善マネジメント」ミネルヴァ書房、2012年、p7-9
- ・中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」、2011年